いつか静かなこの海で　～1人のイレギュラーの物語～

そーりゅー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２０３１年、北朝鮮によるＳＳ―Ｎ―２「スティックス」の襲撃によって轟沈してしまった

米海軍の原子力潜水艦。

その後、艦娘となり、艦これの世界に転生してしまった。

艦娘、妖精、深海棲艦…常識では説明が出来ない事象が次々と舞い込んでくる中、

彼女はこの世界でどう生きていくのか…。

核弾頭さえも搭載したイレギュラーな存在。彼女の壮絶な

もう１つの航海が今、始まる…。

☆自分に合わなかったらプラウザバックをお勧め、いや推奨します。

作者に文才は全くありませんので。期待外れになってしまうかもしれません。

また、米空母の作品から少しリスペクトを行っています。

ご了承くださいｍ（＿＿）ｍ

☆作者の妄想い～っぱい詰まってるよ‼

☆批判・誹謗中傷のみの感想・評価はお断りします。

作者のガラスのハートが木っ端みじんになってしまうので。

あと、『こうした書き方のほうがいい』等の意見がありましたら、

意見投稿お願いします。変えれる範囲で取り入れようと思います。

―２０１７　５／１１―

本来の大湊警備府を大湊鎮守府として固定しました。
ご了承くださいｍ（　）ｍ
――２０１７　５／３１――
大湊鎮守府を攻撃したトマホークの弾頭を熱核から通常弾頭に変更しました。
ご了承くださいｍ（　）ｍ

目次

設定など
ミシガンの設定！ ―― 1
世界観／艦娘設定 ―― 4
用語集 ―― 7
人物集 ―― 10
第一章　彼女とこの世界
第一話　始まりの海 ―― 15
第二話　「決断」 ―― 20
第三話　入港＆接触 ―― 26
第四話　新たな故郷 ―― 30
第五話　補給は大事なのです！ ―― 35
第六話　演習前編っぽい！ ―― 41
第七話　演習後編なのです！ ―― 45
Ｄｅｐｔｈ＃０８　Ａｆｔｅｒ　ｔｈｅ　ｅｘｅｒｃｉｓｅ
47
第二章　日本国とミシガン
第九話　ミシガンとキスカ ―― 50

設定など

ミシガンの設定！

設定集

設定

アメリカ海軍オハイオ級原子力潜水艦２番艦『ＳＳＧＮ―７２７ミシガン』

〔艦級概要〕

艦種：戦略ミサイル原子力潜水艦

艦名：ミシガン

発注：１９７５年２月２８日

起工：１９７７年４月４日

進水：１９８０年４月２６日

就役：１９８２年９月１１日

戦没：２０３１年７月１３日

除籍：２０３１年７月２５日

母港：ワシントン州バンゴール

所属：アメリカ海軍太平洋艦隊バンゴール基地

〔性能諸元〕

水上排水量：１６．７６５ｔ

水中排水量：１８．７５０ｔ

全長：１７０．６９ｍ

全幅：１２．８ｍ

喫水：１１．５ｍ

船体構造：複殻式（改修前は単殻式）

機関：原子力蒸気タービン推進（６０．０００ｓｈｐ）

ＧＥ社製加圧水型Ｓ８Ｇ原子炉

蒸気タービン

スクリュープロペラ

推進：サイドスラスター（両舷各２基ずつ）

速力：水上２１ｋｔ／水中２７ｋｔ
潜航深度：最大５００ｍ
燃料棒寿命：１０～１５年
乗員数：士官１３名
　　兵員１４０名
兵装：５３３㎜水圧式魚雷発射管
　Ｍｋ．４８　ＡＤＣＡＰ　潜水艦用長魚雷
　ＭＯＳＳ　Ｍｋ．７０　音響囮魚雷
　Ｍｋ．４５　ＶＬＳ　潜水艦搭載型ミサイル垂直発射装置
　ＳＬＡＢ　潜水艦搭載型対空散弾誘導弾
　ＵＧＭ―１０９Ｈ　タクティカル・トマホーク
レーダー：ＢＰＳ―１５Ａ対水上レーダー
ソーナー：ＢＱＱ―６パッシブソナー
　　ＢＱＲ―１５曳航ソナー

～兵装説明～
※誘導方式　ＴＥＲＣＯＭ：地形照合誘導
　　ＩＮＳ：慣性航法装置
　　ＧＰＳ：衛星航法

○ＢＱＱ―７パッシブソナー
　ＢＱＱ―７は米海軍の最新鋭のソナー。本ソナーはパッシブ方式にて探知する。パッシブソナーはある離れた物体が発生する音を分析し、その物体に関する情報を得るため、自艦が発見されにくいという特性を持つ。
○ＢＱＲ―１５曳航ソナー
　ＢＱＲ―１５は米海軍の戦術曳航ソナー。別称はＴＡＣＴＡＳＳ。ＴＡＣＴＡＳＳの特徴は、ＴＡＣＴＡＳＳを展張した際、聴音捜索と同時に、潜水艦自身の放射雑音レベルの測定に用いるという点にある。
○ＢＰＳ―１６Ａ対水上レーダー

米海軍の最新鋭の対水上捜索用レーダー。索敵範囲は２５海里。

○ＵＧＭ―１０９Ｈタクティカル・トマホーク

ＵＧＭ―１０９Ｈは、米軍が保有するトマホークの最新発展型。前型より軽量化とより安価なエンジンへの換装を目標に開発された。軽量化に伴う構造強度の低下により、本型は魚雷発射管からの発射ができなくなったため、Ｍｋ．４５といったＶＬＳから発射されることになった。射程は３．０００㎞。飛翔速度は約８８０㎞／ｈ。誘導方式はＩＮＳ、ＴＥＲＣＯＭ、ＤＳＭＡＣ２Ａ、ＧＰＳ、前方監視カメラ、衛星リンクである。

○Ｍｋ．４８潜水艦用長魚雷

Ｍｋ．４８は米海軍の潜水艦用長魚雷。射程は約４０．７㎞、運用深度は１．０００ｆｔ、最大速力は約５０ｋｔである。米海軍の潜水艦のほとんどの長魚雷が本型である。

○ＳＬＡＢ　潜水艦発射型対空散弾誘導弾

ＳＬＡＢは潜水艦用ＶＬＳから発射可能な対空ミサイル。対空ミサイルと言いつつ、実際には爆破地点を設定し、爆破と同時に極小ミサイルを周囲にまき散らして誘導し、攻撃する散弾ミサイルだ。ちなみに被害半径内の命中率は脅威の１００％。米海軍の原子力潜水艦に搭載されている。

世界観／艦娘設定

設定集
設定等

時代：１９５７年
世界観：
艦娘たちが深海棲艦と戦っている「艦これ」の世界。
１９５４年頃までは正常な歴史をたどっていたが深海棲艦が出現したことでそれ以降の現代の歴史とは全く違うものになっている。
（沖縄はアメリカから異常事態のため返還された、トラック泊地等は深海棲艦から奪還。）
ただし日本国内では技術の進歩が大きく、昭和後期と現代が７：３の割合で混ざった状態である。
（新幹線は開通しており、かなり高価ではあるがスマホもある。）
１９５４年に保安隊から自衛隊になる予定だったがＧＨＱからの命令が下る前に深海棲艦が出現したことで
予定上の陸上自衛隊は日本国陸軍に、海上自衛隊は日本国海軍に、航空自衛隊は日本国空軍になった。
陸軍と空軍は深海棲艦からの本土攻撃に対処するため戦車や戦闘機で武装しているが、
海軍は艦娘が深海棲艦と戦い制海権を取り戻そうと奮闘している。
本作はそれから三年が経った世界。

『艦娘について』
第一章「艦娘とは」
艦娘とは何か、簡単に言えば過去の軍艦に宿った艦魂が元。
艦魂とは艦船に宿る魂のことで霊感のある人物や一部の人間は普通に見えたり透けて見えたりする。
艦娘は簡単に言えば艦魂が実体化して人の身体を持った存在である。

艦娘は艤装をつけることで身体能力が上がりスーパーマンまがいのことが出来たり、海の上を走り、
戦闘を行う事が可能となる。
第二章「戦闘等について」
艦娘は基本的な戦闘は艦艇時代を基礎としている。
艦娘は全員、水上スキー方式で移動と戦闘を行う。
艦娘のほとんどは過去の経験から戦闘を行っている。
艦娘と深海棲艦の行う攻撃は元の兵器と同じ威力があるためたとえ小さいサイズであっても駆逐艦の砲弾一発で
船が沈むことなんてザラである。
艦娘は艤装をつけることにより身体能力が上がり、海の上を走り、
戦闘を行う事が可能になることとほぼ人間と同じ体であることは第一章で説明したが　艦娘は装甲が上がるとはいえほぼ人間と同じ体。
第三章「艦娘に関する争い」
何処の世界、いつの時代でも人は論争を起こすものだ。
艦娘についての論争は何処でもある。
主に兵器として扱うか、人として扱うかである。
これについては憲法と法律に定められていない為どこかの国の国会ような意味のない会議がたびたび開かれる。
最近は憲法に従って艦娘に関する法律を作ろうとする勢力が大きいが、それに反対する勢力も一歩引かない状況となっている。
まぁ大抵反対勢力の奴らは汚職などをしているため逮捕されている。
そのため艦娘に関する法律が出来るのも時間の問題となっている。
またもう一つの争いが「艦娘解放団体」が行うデモだ。
これはどこかの頭のおめでたい人が「艦娘を軍から解放しろー!」とか言って始まった団体。
自分たちは戦わないせいか分からんが艦娘を軍から解放してその後、
彼女たちをどうするのかは決めていないようでそのことを言われ

ると「別のことだ」とか言う。
つまり早い話、自分たちの未来が掛かっている事を理解できているのに都合良く片づけているだけなのである。
第四章「艦娘に関する問題」
艦娘に関する問題はブラック鎮守府による過酷な労働などで反乱を起こしたりＰＴＳＤになること等さまざまである。
特に多いのが提督諸君による暴行、セクハラ、強姦などである。
憲兵が調べていても隠し通したり、憲兵がグルだったり、賄賂が流れたりなど　　腐った木材より腐りきっている。
最近は数が減ったものの、まだまだ汚職軍人はいる。
さらに艦娘を人身売買する事案も過去にあった。
以上の事案から精神に異常を患った艦娘用の病院も存在する
しかしそこに就職する者は精神異常者の艦娘が恐ろしいためか少ない。

用語集

用語集
～単語編～

『キスカ島泊地鎮守府』
海軍の中で一番廃れているともいえる泊地の鎮守府。
一応、鎮守府設備一式が整っているものの工廠は無く工作部がある状態。
しかし入渠設備はある模様。
上記の事もあり、艦娘は最低限人数しか居ないが、時々、派遣される。
しかし、艦娘一人一人の練度が高く、演習では常時トップである。
毎年、艦娘候補育成学校からの配属希望書がほぼ届かない事で有名。

『艦娘候補育成学校』
自衛隊では幹部候補生学校に当たる場所。
大本営で建造、又は新しく発見された艦娘が基本的なことを学ぶ場所。
多くの初期艦や特別配属艦娘がここを卒業し、各鎮守府や泊地へと旅立っていった。
現在も多くの艦娘が在籍し、既に退役した艦娘たちからの教えを受けている。

『配属希望書』
艦娘候補育成学校卒業を間近に控えた艦娘が書く希望書。
必要事項を記入し、成績表を同封して各希望の鎮守府や泊地に配送され、
そこで提督が選考を行い、配属を許可されたものは配属する。
許可されなかった場合は他の鎮守府へと配属される。

『兵器派』
艦娘を兵器もしくは道具だと思い、人間らしい扱いをしない派閥。

暴行、セクハラ、強姦、賄賂、人身売買未遂等、黒いものは叩けば叩くほど出てくる。
構成員のほとんどが汚職軍人か、権力を振り回す阿呆である。「ミシガン」や
「エンタープライズ」を狙う軍上層部の人間もここに所属する。
また、作戦考案を行う人間もここに所属している場合が多い。
『人間派』
艦娘を人間もしくは兵士だと思い、人間らしい扱いをする派閥。
兵器派とは打って変わって艦娘への給料や有給の保証、住民票作成などを行ってきた。
まだ勢力的には勝っているものの、時たま行われる兵器派からの妨害に頭を悩ませている。
殆どが軍上層部ではないため、大本営内では力が少し弱い。
『ＵＧＭ―１０９Ｈタクティカル・トマホーク』
タクティカル・トマホークは、トマホークの最新発展型である。これは、ブロック　ＩＶ中止後の１９９８年に同計画のより
廉価な代替案として提案され、当初はブロック　Ｖと呼ばれていたが、ブロック　ＩＶの名称が復活した。
この計画では、生産段階におけるコストの削減が目指され、現行のＴＬＡＭ―Ｃ／Ｄ（ブロック　ＩＩＩ）の半分の価格で、
性能を損ねることなく調達することとされた。そのために軽量化とより安価なエンジンへの換装が行われる。
また、軽量化に伴う構造強度の低下により、潜水艦発射型は魚雷発射管からの発射ができなくなったため、
もっぱらＶＬＳから発射されることになった。尚、魚雷発射管タイプもテストされ英海軍はこれを採用している。
射程は３・０００㎞。飛翔速度は約８８０㎞／ｈ。誘導方式は慣性、ＴＥＲＣＯＭ、ＤＳＭＡＣ２Ａ、ＧＰＳ、前方監視カメラ、衛星リンクである。
『Ｍｋ．４８潜水艦発射型誘導魚雷』
Ｍｋ４８の誘導システムは柔軟性に富んだ、洗練されたものという

ことができ、攻撃に際して多様な選択肢をもたらしてくれる。
大きく分けると、誘導方式は、魚雷本体のソナーのみによる探信／受聴（ａｃｔｉｖｅ／ｐａｓｓｉｖｅ）誘導と、
母艦からの有線誘導の２つである。後者の場合、誘導ケーブルは魚雷と母艦を電子的に結びつけ、
魚雷自身よりも捜索範囲の広い母艦の側のソナーを生かして初期誘導を行うだけでなく、
魚雷のソナーを母艦のいわば拡張された「耳」として利用することも出来るようになる。
射程は約４０．７㎞、運用深度は１．０００ｆｔ（３６６ｍ）、捜索・攻撃深度は（最少／最大）１８ｍ／１．３７４ｍ。
最大速力は約５０ｋｔ、尚１発およそ、２５０万ドルである。

人物集

人物集

『ＳＳＧＮ―７２７　ミシガン』

この小説の主人公。

もともとは米海軍太平洋艦隊バンゴール海軍潜水艦基地所属の

原子力潜水艦『ＳＳＧＮ―７２７　ミシガン』の艦魂であったが、

北の国の奇襲攻撃を受け、轟沈した。

その後、艦これの世界に転生し、キスカ島泊地に所属し、

日本国海軍に積極的に協力するようになった。

補給や整備は他の艦娘を優先することが多く、

提督からは心配されている。いわゆるお人よし。

自身が核弾頭を搭載可能なトマホークと核弾頭を搭載していること

に

動揺している。また、普通なら考えないような戦術を考案し実行する

る強者。

〝戦略〟より〝戦術〟を　第一に考える。

これらの点はエンタープライズと考えが正反対のようである。

海軍鎮守府特別大演習で再会する米海軍太平洋艦隊第７艦隊

第５空母打撃群所属の原子力航空母艦『ＣＶＮ―８０　エンタープ

ライズ』とは

先輩後輩の関係というよりは親友という関係であり、

数多くの悩み事を語っている仲でもある。

海軍鎮守府特別大演習ではトマホークをエンタープライズに迎撃

される。

キスカ島泊地の所属になってからは中立の立場として夜間警備や

艦娘間の揉め事の鎮圧や艦隊の編成の管理、演習関連の処理などを自

主的に行っている。

秘書艦の大淀曰く『提督よりも仕事をしている影の提督』

『ＣＶＮ―８０　エンタープライズ』

この小説のサブ主人公的な艦娘。
もともとは米海軍太平洋艦隊第７艦隊第５空母打撃群所属の
原子力航空母艦『ＣＶＮ―８０　エンタープライズ』の艦魂であったが、
２０６０年、米中戦争終結直前に山東省菜蕪基地所属第８２２導弾旅（９６１１７部隊）
より発射されたＤＦ―２１Ｅ（東風２１Ｅ）によって轟沈した。
その後、艦これの世界に転生し、横須賀鎮守府所属第三水雷戦隊・
第四水雷戦隊と接触、日本国横須賀鎮守府所属空母艦娘となった。
海軍鎮守府特別大演習で再会するバンゴール海軍潜水艦基地所属の原子力潜水艦『ＳＳＧＮ―７２７　ミシガン』とは先輩後輩の関係というよりは親友という関係であり、
数多くの悩み事を語っている仲でもある。
たまにおっちょこいな一面もあるが、普段は冷静な状況判断ができ、
誰からも頼りにされる艦娘である。
また、未来の科学技術をふんだんに駆使し〝戦術〟より〝戦略〟を第一に考えるため、ミシガンとは考えが逆のようである。
ちなみにエンタープライズには核砲弾・核爆弾・空対空核ミサイル・空中発射型核弾道弾といった核兵器が搭載されているが、彼女自身は深海棲艦との戦いでこれら核兵器を使うことを厭わないという考えを持っている。
つまりやるときはやる女。本気を出させてはならない。

〈日本国海軍〉
『伊井波　慎也』
日本国海軍キスカ島泊地司令長官
日本国海軍北東方面艦隊司令長官
日本国海軍連合艦隊参謀
日本国海軍総隊参謀
日本国海軍海上護衛総隊参謀

階級：海軍中将
年齢：３７歳
旧日本国海軍海軍兵学校第６８期卒業（第三位）
旧日本国海軍海軍大学校甲種３９期卒業（第三位）
橘横須賀鎮守府司令長官・草加艦政本部長とは親友であり同期。
人当たりの良く、フレンドリーな人物。たまにボケる。
ガタイは良いが、引き気味なのが玉に瑕。
多くの艦娘を指揮する中で、初期艦である吹雪型駆逐艦２４番艦「電」と恋に落ち
めでたく結婚した。なお、ミシガンや他の一部艦娘からはロリコンと言われる模様。
作戦指揮の際には真面目ではあるものの、普段は比較的はっちゃける性格で
落差が激しい。
人命第一を掲げていて、異端児扱いされるも戦果は上げるため、
一部の軍人からは嫌われている。
『人間派』の一人。
一人称は「私」。
『橘　蒼海（そうかい）』
日本国海軍横須賀鎮守府司令長官
日本国海軍連合艦隊参謀長
日本国海軍総隊参謀長
日本国海軍海上護衛参謀長
日本国海軍中部太平洋方面艦隊司令長官
階級：海軍中将
年齢：３７歳
功二級金鵄勲章受章
旧日本国海軍海軍兵学校第６８期卒業（首席）
旧日本国海軍海軍大学校甲種３９期卒業（首席）
海軍兵学校・海軍大学校を首席で卒業したエリート
伊井波キスカ島泊地司令長官・草加艦政本部長とは親友であり同

期。
冷静沈着で、戦術より戦略を優先する日本海軍の数少ない頭脳派。
エンタープライズと馬が合う。
『エンタープライズ』と『ミシガン』を海軍鎮守府特別大演習で再会させる。
人命第一を掲げていて、異端児扱いされるも戦果は上げるため、
一部の軍人からは嫌われている。
自分より先に艦娘と結婚した伊井波のことをうらやましく思っている。
『人間派』の重鎮。
一人称は「俺」。
名前の由来は右近橘と青に関する名前から。
『黒井　令次郎』
日本国海軍佐世保鎮守府司令長官
階級：海軍大将
年齢：５６歳
旧日本海軍海軍兵学校第４６期卒業（第十一位）
旧日本海軍海軍大学校甲種第２９期卒業（第十一位）
自分の名を世に残すため、艦娘を兵器のようにこき使って戦果を挙げる、
いわゆるブラック鎮守府の提督。艦娘の大破進撃、
艦娘の入渠・補給・整備不許可、艦娘への暴行・セクハラ・強姦・売買等
あげたらキリがない。
もちろん『兵器派』の一人。
『人間派』である橘や伊井波のことを超絶に嫌っている。
１９５５年度第２回海軍鎮守府特別大演習で何かやらかす。
名前の由来は特にないが、すごく思想がどす黒い・ゲスいという意味で付けた。
『吹雪型駆逐艦２４番艦「電」』→『むらさめ型汎用護衛艦５番艦「Ｄ

Ｄ―１０５　いなづま」『
日本国海軍大湊鎮守府に所属していた駆逐艦娘。ブラック鎮守府である大湊鎮守府　　から逃げ出し、ミシガンに保護される。キスカ島泊地に所属後、
元からキスカ島泊地に所属していた電と区別するために
近代化改修を行ったところ『ＤＤ―１０５　いなづま』となってしまった。

第一章　彼女とこの世界

第一話　始まりの海

第一話　始まりの海

１９５５年４月１５日。軍民合わせて約８，５００万人もの犠牲者を出し、アメリカ・イギリス・ソ連が主

となる連合国が日本・ナチスドイツ・イタリアが主となる枢軸国に勝利した第二次世界大戦から丸

１０年がたとうとしていた。空襲などの被害を受けた各国は、徐々に復興を遂げ、それは敗戦国と

なった日本も例外ではなかった。１９５０年に起こった朝鮮戦争による特需もあり、日本は完全復活

を果たした。だが、それも長くは続かなかった。

朝鮮戦争が休戦状態となった3年後の１９５４年、突如として太平洋ハワイ沖にある生命体が出現した。

その生命体は、アメリカ海軍太平洋艦隊司令部が展開していたハワイ州オアフ島を急襲。

数隻の駆逐艦ないし巡洋艦と潜水艦、少数の飛行隊しか配備されていなかった艦隊司令部が

急襲に耐えきれるはずもなく、ほどなくして艦隊司令部は撤退を決定。

米政府もオアフ島を含めたハワイ州の放棄を宣言した。

その後も艦隊司令部を急襲した生命体は勢力を拡大。その容姿から国連は『深海棲艦』と命名し、

国連安保理決議により、各国は深海棲艦との戦争に突入した。当初は圧倒的火力で人間が勝つと思われていた。

しかし現実は甘くなかった。何せ〝標的〟が小さいのだ。人間側は駆逐艦、巡洋艦、戦艦、潜水艦を用いて戦っているが、

これは艦隊決戦や対地攻撃の為に作られているものであり、一番小さい潜水艦でも船体は８０ｍ以上、
また一つ一つの艦砲や魚雷発射管は大きいものとなっている。これが大きいのは、
圧倒的火力を持って敵を殲滅するためである。しかし、深海棲艦は大きく見積もっても〝大人の人間〟程度の
大きさに過ぎず、艦隊決戦の為に作られた駆逐艦・巡洋艦・潜水艦の艦砲や魚雷発射管では大きすぎて
命中しないという欠点があった。

このような点から、世界各地に出現していった深海棲艦の侵攻を防ぎきれるはずもなく、
各地で敗戦を重ねていった。戦局もどんどん厳しくなり、深海棲艦に占領された国もあった。
もうだめか…とあきらめていたその時、深海棲艦との戦争に突入していた日本に救世主ともいえる生命体が出現した。
その生命体は『艦娘』と名乗り、侵攻してきた深海棲艦を撃退した。日本は深海棲艦と戦う事のできる唯一の存在として
艦娘を保護、艦娘と一緒に出現した『妖精』と言われる小人たちとともに
〝新生・日本海軍〟を立ち上げ、日本各地に鎮守府を設置した。
それから一年がたった今日。人類にとっては一番の頼りとなる存在、
そして深海棲艦にとっては一番の脅威となる存在が、この西太平洋の一角で目覚めようとしていた・・・。

――――１９５６年４月１５日　ＡＭ１１：３０　西太平洋――――

周辺には見渡す限り島ひとつ無い穏やかな海が広がり、カモメの鳴き声が飛び交うこの海域で、見たこともない

艤装を付けた一人の少女が呑気に目を覚ました。
「ふぁぁ…へ？ってここどこや！」
目が覚めると私は真っ暗な空間に漂っていた。だが、見慣れた光景であるが。何だか体の感覚がおかしい。
「…体？」
私は疑問に思い自分の体を確認する。
「へ？…これは人間になってるぅぅぅ!?」
私は確か、オハイオ級原子力潜水艦のミシガンという船体だったはず。それが何故か、
乗員のような人の姿になっているのだ。ふとそんなことを思っていると…
『船体としての貴方は一度沈みました。』
…ｗｈａｔ？
そうかそうか。私一度沈んだのか…って納得できるか!!
『落ち着いてください。ですから貴方は一度沈んだんです』
なるほど～そうかぁ～だから人の姿になっているのか～っとその前に聞きたいことが、
「貴方、誰？」
いきなり『貴方は沈んだ』とか言われても理解できないよ!?
『私は貴方の艤装の副長妖精です、フクさんとでも呼んでください。』
副長か～色々突っ込みたいけど我慢する。
「それで私は一度沈んだらしいけどどういうこと？」
『えーとですねぇ。こういうことでして…』
そしてここまでの経緯を5分ほど話してもらった。
「えーと…つまり私は北にある朝鮮の奇襲を受けて撃沈したと」
『そういうことです』
とりあえず私は今、頭の中で分かったことをまとめてみる。
北にある朝鮮の奇襲を受け撃沈→艦娘として転生→そして１９５７年5月1日にタイムスリップした。
…ここまでのまとめて、ふと結論が出た。
「…あれ？ということは私は海の迷い子ってことか」

そうかそうか～タイムスリップして海の迷い子か～
「タイムスリップ!?」
～色々説明を受けました～
「理解した…。それでフクさん。ソナーって今、入ってる?」
とりあえず私は周囲の状況を確認するためにソナーを入れることにした。
『入ってますけど…今はソナー妖精に任せてますが聴きますか?』
へぇ…ソナー妖精も居るのか～。とりあえず私も聴音することにした。
「じゃあお願い」
頼んだ直後に耳から音が聞こえ出し、周囲の状況が手に取るように分かってきた。
一番近い反応は左舷（さげん?）前方４５度、距離約３５００。現在の深度は…８０か。
海流の音に混じって聞こえる４つのキャビンテーション　ノイズ（スクリュー音）
くぐもって聞こえる爆発音と思われる何か。
そして何かがひしゃげる音がして、スクリュー音が３つになる。
うーん…聞きなれた音だなぁ…って…
海戦の真っ最中じゃん!?
危ない危ない…何もしらずに浮上するところだった…。
詳しく聞いてみると反応は１隻と２隻のグループに分かれており２隻のほうは１隻やられたものの
速力変わらず、１隻が押されている感じだった。
「うーん…フクさん、何か分かる?」
とりあえず分からないことはフクさんに聞く方針で行こう。
『まだ音紋記録していないので何とも…』
やっぱり…艦種までは分からないよなぁ…ＩＦＦ無いよなぁ…この時代。
とりあえず、潜望鏡を上げて確認するか…。
「潜望鏡深度１０ｍまで浮上!メインタンクブロー。」

私は潜望鏡深度までの浮上を命ずる。
懸吊状態から深度７０ｍ、５０、３０、２０…と徐々に浮き上がっていく。
そして潜望鏡深度になり、海上の様子を見てみると、そこには中破し、今にも深海棲艦に止めを刺されそうになっている、日本の駆逐艦と思われる艦娘が居た。

第二話「決断」

第二話「決断」

～電ｓｉｄｅ～

日本の駆逐艦娘「電」、彼女は今、窮地に立たされていた…。

電「はわわ…まずいのです。魚雷も主砲弾も底をつきかけているのです…」

本来ならば、駆逐1隻だけで居るはずがないのだがこれにはある理由があるのだがそれは後程。

そして運よく、深海棲艦を1隻沈めたのも、つかの間…2隻が今にも襲い掛かろうとしていた…。

電「(皆、私もすぐ行くのです…)」

爆発音がする…。しかし電は沈んではいなかった…。

逆に2隻の深海棲艦が視界から消えていた…。破片が浮かんでいる事から、沈没したことが伺える。

電「何が起こったのです…?」

それは1人のイレギュラーによるものだった…。

～数分前～

あれは、日本の駆逐艦…?　2隻の深海棲艦が襲い掛かろうとしている…?

「(はっ!!もしかして…やばい?)」

そしてミシガンは数秒考えた後理解した。いや理解してしまったのだ…。

「フクさん!魚雷すぐに撃てる?」

その質問に対し…

『その質問を待ってました?諸元入力及び注水も完了しています。いつでも撃てます!』

妖精さん有能?と心の中で思い、そして命令を下す…。

「艦首魚雷発射管1，2番発射!」

艦首魚雷発射管から発射された2発のＭｋ．４８魚雷は探信音を放ちながら迷いなく５０ノット・・・時速にして約９０km程のスピー

ドで２隻の深海棲艦へ向けて突入していった…。
「頼むよ…間に合って…」
『順調に向かっています。着弾まで１０秒前』
Ｍｋ．４８魚雷は１発でフリゲート艦を「叩き割る」程に威力が高い。しかし、被弾しない前提で造られる「フリゲート」と、
被弾に備えて分厚い装甲を貼る「戦艦」では防御力が桁違いだ…。
今回は軽巡２隻だから大丈夫だと思うけど…。
『３、２… 着弾、今』
直後に２隻の深海棲艦が濁った水柱に包まれて見えなくなった。
『ソナーに感無し。目標２隻の沈没を確認』
２隻の深海棲艦は沈んだか…この後、どうしよ（・・ω・・）
補給も必要になってくるし…
『単艦ではどうしようも無いので、接触を具申します。後、言い忘れてましたが心を読めるので言わなくても大丈夫です』
この時、ミシガンは思った。妖精さんマジ有能だわ…。
うーん…確かに…コンタクトしてみるか…。
「メインタンクブロー！機関第二戦速！」
第二戦速だから…１８ｋｔぐらいか…。
『アイ・サー！メインタンクブロー！』
復唱が聞こえるとスクリューの回転音が聞こえ、日本の駆逐の艦娘に近づきながら慎重に浮上していく…。
うーん…言葉通じるかな…。一応、日本語喋れるけど…。
『言語の問題については問題ありません。駆逐の艦娘の方はこちらに気づいていないようです』
コンタクトするべきだな…。
そして私は駆逐の艦娘に近づき話しかける。
「貴方、大丈夫？」
～電ｓｉｄｅ～
電「はわわ…何とか助かったのです…怖かったのです…」
そうして電はその場に蹲り、ミシガンの接近に気付いていなかった。

そしてミシガンから話しかけられると…
電「はわわ…誰なのです？（黒い…深海棲艦…？）」
「私は米海軍太平洋艦隊バンゴール基地所属のＳＳＧＮ―７２７　ミシガン。所属鎮守府は…無い…」
電「（米海軍…アメリカ…）わ、わたしは、日本国海軍大湊鎮守府所属の駆逐艦「電」なのです」
アメリカ…今は敵じゃないけど…昨日の敵は今日の友？って言うし…大丈夫かな。
「電というのか。よろしくね。それでこんな所で１人で何やっているの？」
電「…信用できそうなので話すのです。あれは数年前に遡るのです…」
そして電は今までの出来事を全て話し始めた…。
～ミシガンｓｉｄｅへと戻る～
私は日本の駆逐艦「電」と接触した。
そして何があったかを理解した…。
「なるほどね…そういうことがあったのね…」
とりあえず「電」からの話で分かったことは
大湊鎮守府の提督が数年前に暗殺され新しい提督になってからブラック鎮守府、略してブラ鎮になったと。
それで、多くの艦娘が暴行され、捨て駒として出撃させられて、沈んでいった…。
そして…艦娘は「電」のみになり、隙を見て逃げ出したが、深海棲艦に遭遇して戦闘したということ。
つまり…大湊鎮守府の提督は屑ということ…。
そして理解が終わったころ…。
電「さっき助けてくれたのは貴方なのです？」
電にそう聞かれる…
「うん…私が咄嗟の判断で助けた」
そう、返答すると…
電「ありがとうなのです！でも…私はこれで１人なのです…」

その言葉にミシガンはふと呟く…。
「1人？私が居るじゃない。電、大湊鎮守府の座標分かる？」
電をこんな風に変化させた大湊鎮守府は許さない…。ちょっとお仕置きが必要のようね…。
電「ありがとうなのです。これからよろしくなのです！大湊鎮守府の座標？分かるけど…どうするのです？」
「まあ…ちょっとしたお仕置きだよ。電、その鎮守府に対して罰を与えようと思うけど良いよね？」
そう「電」に聞くと…
電「思い出はあるけど…皆を沈めた罪は重いのです。罰は受けてもらうのです」
電は覚悟を決めた…私も「決断」しないとね…。

「対地攻撃用意！総員、戦闘配置！」
私は対地攻撃の指示を下す…。艦の頃にも直接対地攻撃を行ったことは無かった…。初の対地攻撃…。
『戦闘配置準備良し！対地攻撃準備！』
そして戦闘配置完了の報告を聞き、次の指示を下す。
「対地攻撃用意！目標、日本国大湊鎮守府！座標、北緯４１度１４分０４秒、東経１４１度０８分００秒！」
座標入力の指示を下す。
ミシガンの目的は大湊鎮守府に対しての対地攻撃なのだ…電はあまり理解していなかったが、
何となく、意味は分かったらしい。
『座標入力良し！Ｍｋ．４５　ＶＬＳ１番、発射準備良し！』
そして私は「決断」をする…。

「Ｍｋ．４５　ＶＬＳ１番開放！タクティカル・トマホーク攻撃はじめ！」
そして発射の指示を下す…。このＭｋ．４５　ＶＬＳに入っているトマホークの弾頭は通常弾頭だが、一発で多大な被害を出すことが

できる。
実弾をを実戦で使うのは初めて…威力は未知数。少し不安もある。
そういう心境であった…。核弾頭を使うことも考えたが関係のない市民への
被害を考えてやめることにした。
市民の不安を煽ることは踏まえての攻撃ということは
ミシガン自身も理解していた…。
『発射成功！目標着弾まで残り１５分！』
着弾まで１５分…これは宣戦布告なしの攻撃…つまり奇襲攻撃に等しい。だが、艦娘達を捨て駒として使ったのだ。
自身も攻撃される可能性も踏まえてということが伺える…。でも一応、警告文だけは出しておくかな。

～大湊鎮守府～
軍人Ａ「提督、電は結局行方不明ですが…先ほど、警告文が届きました」
１人の軍人が提督と呼ばれる男に報告する。
提督「警告文？読み上げてみろ」
軍人Ａ「我はこれより本鎮守府へと対地攻撃を実施した。使用兵器はミサイル。現存の技　　術では無い兵器である。
これは威嚇攻撃ではない。貴官らに対する罰である。
米海軍原子力潜水艦ミシガン　発　宛　日本国海軍大湊鎮守府…だそうです。」
提督「はははっ！笑わせてくれる。みさいる？何だそれは。アメリカからの攻撃か。どう　　せ艦娘を羨ましがっているのだろう
そんな警告文は放っておけ。電の件だが…見つけ次第…任せる。」
軍人Ｂ「提督大変です！本鎮守府に対しおよそ８８０ｋｍ／ｈにて謎の飛翔物体が接近！」
提督「何だと・・・機影は何処にも・・・!!何だあれは!?」
部下からの報告を受けた彼は何処からともなく聞こえてくる轟音

に気づき窓の外をみる。すると海の方から矢のようなものが零戦よりも速い速度で飛んできた。

そして矢のような物は意志があるかの如く一度上昇したかと思うと起爆し強烈な光と熱、爆発音を轟かせ提督達の意識を奪いさった。

『着弾まで3、2…今!』

着弾の報告が入る。

「これでまた1つ追い詰められたね…これからどうするか…」

とりあえず…どこかに入港したいけど…道のりは長いな…。

こうして、ミシガンは大湊鎮守府への対地攻撃を実行した。そして新たな出会いとも遭遇することとなることを

この時はまだ知る由も無かった…。

第三話　入港＆接触

第三話　入港＆接触

あの対地攻撃の後、私と電はある場所へと向かって航行していた…。

どこへ向かっているのか。それは数分前に遡る…。

～数分前～

「電、聞きたいことがあるんだけど…この近辺に休めそうな場所ない？」

私はとりあえず休むために近辺に休めそうな場所がないか、聞いてみることにした。

電「う～ん…あるにはあるのです。大湊鎮守府から少し北上するとキスカ島泊地があるのです」

キスカ島泊地…ミシガンは聞き覚えがあった…。

ミシガンの居た世界で第二次世界大戦中日本軍が撤退が奇跡的に成功した島だと乗員が読んでいた本に書いてあったのを見たのだ…。

電「キスカ島泊地は廃れてるけど鎮守府としての設備は一式整っているのです。休むならそこが良いと思うのです」

そして…ミシガンと電はキスカ島泊地に向かうことにして現在に至るのである…。

「電…一応、打電しておこう。いきなり攻撃されるのは避けたいからね」

とりあえずキスカ島泊地に打電することにした。味方からの誤射は避けたいからね。

電「了解なのです。」

～同時刻　キスカ島泊地鎮守府～

電『提督、大湊鎮守府の電から打電です。内容は…我ト随行艦一隻ハ本鎮守府への入港許可ヲ求…です』

???「そうか…。先ほど大湊鎮守府が襲撃されたという打電が入った…恐らくその影響だろう」

提督と呼ばれた男性はまだ若く、歳は２５～２７という外見であった。
???「…返信。入港を許可、と」
電『了解です』
そして電が執務室を出て通信室へと向かう。
そして提督が独り言を呟く。
???「私の勘だけど…これから大きな問題に巻き込まれそうな気がする…」

～そして再びミシガン一行～
電「キスカ島泊地鎮守府より返信…入港ヲ許可ス…なのです」
キスカ島泊地鎮守府より返信された文を電が読み上げる。これで今後の方針が決まるのだが…
「そう…時間的に後、１５分ぐらいかな？」
電から入港許可が下りた事を聞き、ほっとした。これで今後の方針が決まったのだから…。
そして私は入港までの時間を見計らう。
『…！ミシガンさん。右舷前方６５度、距離３５００。キャビンテーションノイズ４探知。　接触まで推定５分』
副長がスクリュー音を４つ探知したことを報告する。
敵か？と思ったけれどその不安は直後に無くなった。
『前方接近艦隊より発光信号受諾！入港指示ヲスル。我ニ続ケ…です』
副長より更に報告があり、接近中の艦隊が鎮守府からの迎えということが分かった。
そして、ミシガン一行は艦隊に近づくことにした…。

「前に居るのは電というのは分かるけど…後ろに居るのは一体誰なのかしら…」

そう言うのは、第六駆逐隊旗艦の雷であった。
雷はほかの艦娘たちにも意見を聞いてみた…
「腕に魚雷発射管みたいなのを付けているし…潜水艦じゃない？」
そう解釈する自称「レディ」の暁。
「でも背中に箱みたいなのを背負っているけどあれは何なのだろう」
そう疑問を持つのは青っぽい白の髪も持つ響
「とりあえず詳しい話は後で聞くことにして入港の誘導をするよ」
そう、駆逐隊をまとめたのが提督の秘書艦　電。

そしてミシガン一行は第六駆逐隊誘導の元、入港したのであった…。

「総員、入港用意！速力最微速！」
雷の指示で艦娘たちは徐々に速度を落としながらキスカ港に入港していった。

「フクさん。原子力機関停止！」
『了解です』
それに続いて不慣れながらみんなと波長を合わせ、ミシガンもキスカ港へと入港していった。

「よいしょっと…」
苦労しながらも何とか入港したミシガンは艤装を体内に収容すると、
キスカ島泊地鎮守府へと上陸した。

そして、ミシガンのもとに一人の男性がやってきた。
???「初めまして。君が電だね。それでそっちの艦娘は…？」
電「はい、大湊鎮守府所属の電なのです！」
ミシガンは男性の問いに対して口を開く…。

「わ、わたしは…米海軍太平洋艦隊所属、原子力潜水艦ミシガンです。それで貴方は…？」

そしてミシガンが所属を応え、ミシガンもまた男性へ質問する。

彼女の前に突如現れた男性。帝国海軍の第二種軍装によく似た軍服を着用しているので、

その男性は軍の関係者であることがわかる。階級章からしておそらく海軍中将だろう。

???「私はこのキスカ島泊地鎮守府の司令官、つまり艦娘たちの提督をしている伊井波慎也。階級は海軍中将だ。」

その男は伊井波慎也と名乗った…。

この男性とミシガンの出会いがこの世界を大きく動かすことなど今は誰も知る由など無かったのである…。

第四話　新たな故郷

第四話　新たな故郷

ーキスカ島泊地鎮守府　執務室ー

「そこの席に座ってくれ。」

「は、はい」

伊井波はミシガンを用意した席へと座らせた。保護された電は入渠中である。

ミシガンとこの世界の軍人との対談が今、始まった。

「改めて紹介しよう。私がここキスカ島泊地司令官の伊井波慎也だ。もう一度自己紹介を頼めるかな？」

「私は米海軍太平洋艦隊キトサップ海軍基地所属のＳＳＧＮ―７２７ミシガンです…。」

米海軍…そう聞こえた瞬間、司令とその隣に居る秘書艦だと思われる電は顔をしかめた。

それはそのはず。連合国によって数多くの日本艦艇が沈められたのだから…。

「米海軍…君は１９５６年現在の米海軍なのか？」

「えーと…違うんですよね。」

そして数秒の間が空き…

「え？どういうことだ？」

彼女は直ぐに否定した。やはり米海軍という単語を聞くとそう反応してしまうのだろう。

この世界を生きる人間にとって米海軍は１９５６年現在の米海軍しか知らないのだから。そして彼女自身、それを否定している。

司令はそのことについて気になっていた。

「恐らく…伊井波司令の頭に浮かんでいるのは１９５６年現在の米海

軍。私の所属は７５年後の米海軍です。」
そしてミシガンは気づいた。あ、しまった…。と。
『『７５年後!?』』
この反応はそれもそのはず。本来ならこの世界に存在しないはずの艦娘なのだから…。
「えーと…つまり君はこの世界の艦、いや艦娘では無いと…?」
ミシガンは少し考えて返答する。
「まあ、そういうことになりますね。タイムスリップ…いや転生だと私は理解しています。」

司令は何かを考えた後、ミシガンにある質問をする。
「ふむ…なら話は早い。７５年後ということはこの世界と君の世界の科学技術は君の世界のほうが進んでいるだろう。それを見込んでお願いがある…。」
何だろうとミシガンが思っていると…。

「我々に協力してくれないか?」

司令から強い意志と少しの願望がこもった真剣な声でそう言われた。協力…つまりこの世界の日本海軍の
指揮下に入り、作戦行動を共にするということ。それはこの世界の日本にとってとても有利なこととなる。
ミシガンの能力をこの世界の軍の関係者や艦娘たちはまだ自分の目で見たことが無い。
この能力をふんだんに発揮すれば、第二次世界大戦時の兵装で互角に戦う深海棲艦など容易く倒せる。
しかし、指揮下に入るということは上からの命令を聞かなければならない。
もしも彼女の兵装について『技術提供をしろ』と命令されたら、技術提供をしなければならない。
そんなことを考えているミシガンをよそに司令は話を続ける。

「日本…いや世界は今、窮地に立たされている。1年前に出現した深海棲艦のせいで我々は地獄を見ているのだ。
日本は鉱物資源の採掘・食糧の生産に関してお世辞ながらもいい状態とはいえない。まぁ、自給率が低いってことだな。
にもかかわらず深海棲艦は日本のシーレーンを分断し、日本を孤立化させようとしている。
日本軍も西太平洋における制海権・制空権を失ってしまい、保持しているのは日本近海だけなのだ。
その日本近海にも最近は深海棲艦の泊地ができたり…このままでは
日本は『餓島』と化してしまう。だから君にも協力を要請したい。」

ここまで言われてはさすがにかわいそうだと感じてきたミシガンだったが、やはり協力となると
指揮権はどちらにあるのか。そこが悩みどころだ。
日本軍の指揮下に入るか、太平洋を彷徨う漂流者になるのか。選択肢は二つに一つだ。
そして彼女はある事を考えたうえで一つの答えを出した。

「…わかりました。私の艦娘です。条件付きで協力しましょう。」
「おお!協力してくれるのか…え?条件…?」

条件付きなら協力しても良い。そう考えた彼女は、どんな条件を突きつけられるかわからなくて
焦りを隠せない司令にその条件を打ち明けた。
「じょ、条件って…?」
「はい。私の艤装・兵装技術に関して日本国軍及び日本国の軍事技術を研究…その他軍事に関する専門機関に
技術情報提供を一切認めないこと。私の艤装・兵装の補給に関する物資・支出に関して日本国がそのすべてを負うこと。

また、艤装・兵装の補給に際して必要な情報の提供は私が認める者のみとすること。私の艤装・兵装に関して貴官らの命令は
一切認めないこと。また、保護した電を一時的な休養を要求。また、他鎮守府への異動を認めないということを
要求します。これらの条件がもし守れず、私の要求が破られた場合私はあらゆる手段を用いて滅ぼします」
ミシガンは自分がこの世界で彼らと協力できるギリギリのラインを穏やかに提案した。
さもなくば、この世界の軍事バランスが大いに崩れてしまうからだ。
７５年後の艦がホイホイと自分の技術を提供してしまっては一巻の終わりだ。
そしてこの条件を聞いた司令と秘書艦はだらだらと汗を流している。彼女がそんな恐ろしいことを穏やかに
言ってきたことに恐れを抱いているのだろう。
そして…

「それからもう一つ。私と貴官らの関係はあくまで同盟関係のようなもの。私はアメリカ海軍太平洋艦隊の原潜として
様々な作戦に参加していました。ですので…自分でいうのもなんですがアメリカ海軍の原潜という名誉ある私の経歴を
捨てることはできません。私があなたたち日本海軍、そして日本海軍に所属する艦娘と一緒に戦うのであれば、
私は日本海軍の艦娘ということではなく、日本海軍と同盟関係を結ぶアメリカ海軍の艦娘として戦います。
多少は伊井波司令の指揮下に入ることになりますが、あなたがた日本海軍に完全編入されることは認められません。
というより許されることではありません。このことについても守ってください。もしもの対応はさっきと同様です。」

ミシガンはそう断言した。これは自分の艤装のこと以外に決して

譲れない絶対の条件の一つだ。
彼女が艦娘としての生を受けてからいろいろなことがあったが、彼女がこの世界に転生してからまだ数日しかたっていない。
そして旧帝国海軍は何よりも結果を尊重する。それは対深海棲艦用に設立された日本海軍も同じだ。
日本海軍は旧帝国海軍の伝統を受け継ぎ、日本海軍軍人の中には旧帝国海軍軍人の者もたくさんいる。
というより、伊井波司令がその一人だ。これは海上自衛隊にも言えることだが、アメリカによって制限を張られている
海上自衛隊より、在日米軍やＧＨＱが撤退し何物にも縛られない日本海軍は言い換えれば旧帝国海軍そのものだと言える。
そのような現代にはない危険思想を持つ組織に身をゆだねるのは、誰でも難色を示す。
「…わかった。君にも事情があるんだな。上に掛け合わせておくよ。」
「あなた方は知らないかもしれませんが、このような条件を提示するのは私はそれくらい危険な存在なのです。
もしかしたら私みたいな艦娘は今まで出現しなかったかもしれないし、これからも出現しないかもしれない。
しかし、あなた方はパンドラの箱を開いてしまった…だからこれくらい守ってくれないと、
私の判断一つであなた方の生活すら変貌してしまいます。その点をどうぞお忘れなきように。」
「そうか。では、ミシガン。今後ともよろしくな。ともに国を守る者同士、頑張っていこう。」
「こちらこそ。」
これを以てミシガンはキスカ島泊地という新たな故郷で新たな人生の一歩を歩み始めたのであった。脅迫という概念から…ね。

第五話　補給は大事なのです！

――――１９５６年４月１６日　ＡＭ９：００　工作部――――

ミシガンと伊井波司令の対談の翌日。ミシガンは伊井波司令に呼ばれて、キスカ島泊地鎮守府の工作部へと来ていた。

「やあ、朝早くから急に呼んですまないな。」

そう言う、何故かまだ寝間着姿の伊井波司令。

着替えて来いよ…という顔を私と同じく呼ばれてきた電…いなづまがしていた。

何故、電じゃなくていなづまかって？それは昨日の対談の後に遡る。

電は伊井波司令がケッコンカッコカリをした「電」と区別をつけるために、

電を入渠させるついでに近代化改修を行ったところ…

何と…「ＤＤ―１０５　いなづま」になってしまったのだ。

彼女自身はあまり驚いてない様子で、ミシガンも驚いてなく、伊井波司令のみが

驚いていた（）

ということがあって、今に至るのだ。

「それで、何故私たちを呼んだのです？」

伊井波司令に自分たちを呼び出した理由を聞くいなづま。伊井波司令は穏やかに２人にその理由を話した。

「いなづま、毎年この時期に行う海軍恒例の行事って何か分かるか？」

「この時期に行う海軍恒例の行事…あっ！海軍鎮守府対抗特別大演習ですか？」

いなづまの回答に正解といわんばかりに笑みを浮かべる伊井波司

令。果たして
　海軍鎮守府対抗特別大演習とは一体何なのだろうか。
「あのぉ…海軍鎮守府特別大演習って何ですか？」
「ああ…海軍鎮守府特別大演習というのは毎年４月のある期間に行われる特別演習のことでな、
　横須賀鎮守府・舞鶴鎮守府・呉鎮守府・佐世保鎮守府を始めとする日本海軍管理下の各鎮守府・泊地の艦娘艦隊が
　同じ演習海域で同時に戦闘を行うっていう演習だ。いろいろな艦隊が同時に演習を行うから…
　はっきり言って目の前にある艦隊を虱潰しに潰すって戦法が多い。で、今回は明日の４月２０日に開催されるわけなんだが…
　この特別大演習はその名の通りちょっと特別でな。普段の演習と違って、陸海空軍のお偉いさん、
　内閣総理大臣や各国務大臣、国会議員まで視察に来るくらいの重要な演習なんだ。もちろん一般開放もされるけどね。
　そして優勝した鎮守府には賞品として資材と新規開発された艦娘用兵装が贈呈される。」
　伊井波の言葉に少しばかりミシガンは首を傾げた。彼女がいた世界では特別大演習のような大規模演習は行われていない。
　理由としては…莫大な費用が掛かるから。しかし、この世界ではそれが行われている。
　彼女にとってどうやらそれが疑問に感じたようだ。
「その様子じゃどうやら疑問に思っているようだが…この演習は普段の演習とは違う特別なもの。
　この国には鎮守府に所属する艦隊のほかに、大本営直属の連合艦隊というものがある。
　所属艦娘は毎年変わっていくんだが…上層部が参加艦娘の練度の高さを見極め、
　翌月に結成される連合艦隊に引き抜くという選考会でもあるんだ。だからこのような大規模な演習を行わなければならない。
　そして現在、ミシガンという能力未知数な艦娘がいる。ならこの演

習でその能力を測ろうと思って、君を呼んだんだ。」
「なるほど、そうだったんですね。」

伊井波の言葉にミシガンは頷いた。大規模な演習を行う理由に納得できたようだ。
しかしミシガンは一つ疑問があった。ここに来てから誘導してくれた艦娘以外に
ほぼ艦娘を見ていないのだ。そんな事を考えていると…。

「その顔だと、この鎮守府にはほとんど艦娘が居ないような…的なことを考えているね。
その問題は解決されている。この鎮守府には演習時には特別に派遣されることが決まっているからね。」

なるほど、とミシガンは理解できたようだ。
「私がその演習に出場すると…あのぉ…私といなづまの弾薬の補給とかは可能なんですか？
この世界に無い技術ですし…」
ミシガンが気になること…それは自分の艤装・兵装の補給に関することであった。
彼女も艦娘である以上、何かしらの整備や補給を受けなければならない。彼女自身が戦うと決めた以上、
それは必要不可欠なことだ。だが、彼女がいた世界とこの世界とでは、約７０年もの技術格差が存在する。
この世界では彼女が持つ兵装など常識の範囲内におけるものではない。
だから彼女の艤装・兵装を複製できるかどうかも怪しい。

「補給？それなら大丈夫だ。君の艤装には艤装妖精っていう妖精がいるだろ？」
「まぁ…いますけど…その妖精がどうかしたんですか？」

「実は鎮守府の工廠にも工廠妖精というのがいてな…その工廠妖精の力を借りれば、たとえ時間がかかろうとも、
大抵の兵装なら複製可能だ。ここは工作部だから工作妖精だな。」
伊井波は彼女の不安を物色するかのように言い放った。
「そ、そうなんですか!?」
「ああ。だから君に搭載している兵装の一部を工作妖精に提供してくれたらいい…
もちろん対談の時に提示された条件の通りにする。君の兵装は我々の立場からしたら喉から手がほしいものかもしれない。
だが、君が提供してくれなければ君が使用した弾薬の補給は１００％不可能だ。
なるべく早く提供してくれるとこちらも大助かりだ。」
「…分かりました。今、渡せば良いですかね？」
「ああ、頼む。」
そう伊井波司令が言うと、工作妖精が近づいてきた。

彼女は艤装を展開する。いなづまも同様に艤装を展開した。
彼女は米海軍のサマーホワイトと呼ばれる夏用軍服の海軍准将用軍服を着用していた。
これがミシガンの艦娘としての正装だ。
いなづまは海上自衛隊の第３種夏服を着用していた。
「えーと…解析してほしい兵装っていうのが…艤装妖精！Ｍｋ．４８とトマホーク１発ずつ取り出してくれる？」
そう命令すると、待っていましたと言わんばかりに整備員妖精がＭｋ．４８魚雷とトマホークを１発ずつ取り出した。
「取り出しましたよー」
「じゃあ、それを工作妖精に渡してください」
「了解ですー！」

整備員妖精たちは取り出したトマホークとＭｋ．４８魚雷を工作妖精に渡した。
いなづまも同様に３種類のミサイルと機関銃弾と砲弾を手渡した。
「確かにもらいました…けど、これはいったい何なんです？片方は魚雷って分かりますけど…」
「まぁ…未来の兵装とだけ言っておきます。詳しくは言えません。ですが、それぞれ使用用途が違うので、
くれぐれも間違えないようにしてください。あと工作部外への持ち出しも…できればご遠慮いただきたいです。」
「分かりました。一日あれば工廠妖精さんが解析してくれるので、待っててくださいね。あ、あとこれ。
明日の演習で使う弾頭の材料であるペイントです。明日はこれを使って演習を行うので弾頭を
これに変更をしておいてください。できなかったら私がやりますから。」
分かりました、と言うとミシガンといなづまは工廠を後にした。

――――４月１６日　ＰＭ２：００　ミシガンといなづまの部屋――――

工作部に兵装解析を頼んだ後、ミシガンといなづまは伊井波司令が用意してくれた
部屋に戻っていた。
いなづまは疲れたのか寝ていた。
「それにしても明日から海軍特別大演習があるのか…副長、どうやって戦ったらいいかな？」
「そうですね…やっぱりトマホークによるアウトレンジ攻撃しかないんじゃないですか？自衛兵装は、魚雷と囮魚雷しかありませんし…」

「だよねぇ～」

「まあ…とにかく敵に見つからなければ良いんじゃないですかね？余程、見つかることは無いでしょうし。」

「そうだよね。演習相手を発見次第、トマホークを叩き込もうか！」

「結構ガチなんですね、ミシガンさん。」

そう副長妖精に言われると、ミシガンは立ち上がり、ガッツポーズをしながら言った。

「だって、今回の演習は私が艦娘というものになって初めての実戦形式で行われる戦いだよ！そりゃあ燃えるでしょ！」

「確かにそうですけど…まぁミシガンさんがそこまで意気込んでいるのでしたら

私たち艤装妖精も全力でバックアップします！」

「うん！よろしくね！」

そういうと彼女たちは明日の特別大演習のために作戦会議を進めるのであった。

「はぁ…弾頭変えるのめんど…」

「そないなこと言わずに…」

大演習で新たな出会いがあるとはこの時は誰も予想していなかった…

第六話　演習前編っぽい！

第六話　演習前編っぽい！

――――１９５５年４月２０日　ＡＭ１０：３０　相模湾／海軍演習海域――――

天気は快晴。風も吹かない相模湾。天気が良ければここから富士山も見え、出撃していく

艦娘たちのちょっとした休息にもなっている。今日も富士山の姿を確認することができるが、

そんなことをしている暇ではない。

なぜかって？

それは…キスカ島泊地艦隊が遅刻しているから（）

遅刻した理由としては、ミシガンといなづまの演習弾の作成に手間取り、

時間がかかってしまったのだ。

そして、この男は…

「…ふっふっふ蒼海め、この演習で確実に叩き潰してやる…（ 艸、＊）」

こんな、ご様子の伊井波司令である（ ・ω・、）

この時、伊井波司令は知らなかった…横須賀鎮守府も切り札を持っていることに…

その伊井波司令の切り札の当の本人、ミシガンは…

演習海域深度８０に居た。

水上艦隊とはいなづまを通し、通信回線を保っており、

対空目標などはいなづまの情報を提供してもらっている。

「…ソナーの反応だと…ここから３０km先と５０km先に艦隊があるわ

ね…」
ミシガンは自身のソナーで艦隊を2つ探知していた。
そして、衝撃な事態が起きることとなる。
『…!?、30㎞先の艦隊、撃破されました！いなづまが一瞬、航空機を探知した模様。現在、解析中です！』

え？撃破された？
ミシガンは驚愕していた。それもそのはず、この世界の航空機ならレーダーに
映るはずなのだ。
なのに今回は一瞬しか映らなかった。それがミシガンにとって一番の疑問だった。

これがミシガンにとって色々な意味で悲劇を生むことになるとは1人の空母艦娘を除いて
知る由は無かったのである…

「副長、攻撃を実施するわよ。今ならもう1つの艦隊を叩けるわ。」
とりあえず私は攻撃を実施することにした。今ならもう1つの艦隊を叩けるからね。
（艸、＊）

「Mk．45VLS、37番から48番開放！目標、トラックナンバー2000から2011！トマホーク攻撃はじめ！」
そして、ミシガンが背負っている艤装のVLSが開き、12発のトマホークが放たれた…。
トマホークは順調に飛行し…艦隊を撃破すると思われていた…
しかし、予想外の事態によって
”トマホーク”が撃破されることとなる。

『!?、トマホーク全弾迎撃されました！詳細は不明！現在、情報を収集中！』
「何ですって!?」
トマホークが全弾迎撃された、この事態をミシガンは受け入ることが出来なかった。
それもそうだ、普通ならばこの世界の艦娘が７５０km／hで飛行するトマホークを迎撃するなど、
神業でしか無いからだ。
しかしミシガンは諦めなかった。こんな所で諦めたら米原潜の名が廃るという覚悟から…
『それで…どうします？現在、照準を当てている艦隊は７５０km／hを誇るトマホークを迎撃する力があるんですよ？』
「７５０km／hは誇れないんじゃ…でも、その点なら大丈夫。物量攻撃で行くから。」
『物量攻撃って…何だが旧ソ連みたいな感じですけど…。』
それしかないでしょ、とミシガンが副長に答えると、第二次攻撃の準備を開始した。

「今度は艦娘一人につき3発で行くよ！ＶＬＳ４９番から８４番開放！目標、トラックナンバー２０００から２０１１！トマホーク、攻撃はじめ！今度は見つからないように
スキミング飛行させなさい！」
『Ａｙｅ　ｍａ，ａｍ！』

ミシガンは目標にしている艦隊…横須賀鎮守府艦隊に対し、計３６発のトマホークを〝恐らくばれないであろう〟経路で
発射した。

しかし…それもまた一人の空母艦娘によって撃破されることとなる…。

『…第二次攻撃全弾迎撃されました…未だに詳細は不明ですが…米海軍識別番号を
水上レーダーが探知。』
え？識別番号を探知？
ミシガンは第二次攻撃が迎撃されたことよりも米海軍識別番号…
俗にいうＩＦＦを探知したことに驚いていた。
「それで…識別番号は誰なの…？」
ミシガンは艦娘だと確信していた。ここまで来ると、船で現れたほうが逆におかしいのだ。
『識別番号…米海軍原子力空母…ＣＶＮ―８０　エンタープライズです！』
「……は？エンタープライズ？」
その結果を聞いたミシガンは驚き、困惑した。
そして…演習は思いもよらない方向へと進んでいくこととなる…

第七話　演習後編なのです！

『いなづまのレーダー探知！対空目標１、機体照合不可能！』
副長から正体不明機体の接近が報告される。
そしてどう対処するか…そう考えていたその時…
『接近中の機体より何かが発射されました！』
「回避行動！急速潜航急いで！」
私は直ちに回避行動を指示する。
だが一発の矢は…私へと迷いなく突っ込む。
「Ｃｏｎｔａｃｔ！　Ｉｎｃｏｍｉｎｇ　ｔｏ　ｕｎｋｎｏｗｎ！
Ｂｅａｒｉｎｇ　０５０、Ｒａｎｇｅ　５ｍｉｌｅｓ、
Ａｉｓｐｅｅｄ…４３１ｋｎｏｔｓ!?」
「え!?４３１ノット!?嘘!?た、対魚雷防御態勢!!!」
弾種不明の目標が自分に接近していることを知ったミシガンは
対魚雷防御態勢をとった。
しかし…正体不明機体…Ｆ／Ａ―１８Ｅから発射された一発の対
潜ロケット
『ＡＵＭ―７　ＡＡＳＲＯＣ』が命中した。
「きゃあああああああ!?くっ…被害報告！」
『だめです…大破してしまいました。トマホーク及びＭｋ．４８、攻
撃不能です。』
ＡＵＭ―７　ＡＡＳＲＯＣはミシガンに命中。機関部周辺以外の
８割が
ペイントまみれとなって大破・航行不能判定になった。
「そんな…」
そう言ってミシガンは艦隊の艦娘たちに申し訳なさそうに謝りな
がら、
艦隊を離脱。横須賀鎮守府に戻るため、針路を北に取った。
横須賀鎮守府へと戻ったミシガンに一本の通信が入った…

この通信により彼女は新たな仕事を受け持つこととなる…
『ミシガンさん、通信です。発信者は…橘蒼海です』
「…誰かは分からないけど話はしてみるべきね。繋げて」
そして通信が繋がれる…そして…
「はい…はい、分かりました。では」
ミシガンは通信を切る…そして指示を下す。
「対水上戦闘！トマホーク攻撃用意！目標、佐世保鎮守府演習艦隊！演習で実弾を使った奴らに罰を下すわよ！」
『ア、アイサー！』
「ＶＬＳ１番～２４番開放！目標、トラックナンバー１０６０から１０７１！
トマホーク、攻撃始め！」
そしてミシガンよりトマホークが放たれた。
佐世保鎮守府の演習艦隊へと…。
『佐世保鎮守府演習艦隊への全弾着弾を確認。目標の撃破も確認しました』
「そう…対水上戦闘用具収め。とりあえず…蒼海という司令の所に行くわよ」
そう言ってミシガンは陸に上がり、蒼海の元へと向かった…。
最高の再会と最悪の展開を目指して…。

その頃のこの男は…
「ええ…ミシガンが敗れた…蒼海め…くそぉぉぉ」
キスカ島泊地鎮守府の司令、伊井波はたくさんの書類に囲まれて一人で嘆いていた…（ｰ・ω・）
※ちなみにこの男は負けたこと以外事を知りません

Ｄｅｐｔｈ＃０８　Ａｆｔｅｒ　ｔｈｅ　ｅｘｅｒｃｉｓｅ

「貴方が…橘蒼海ですね…」
彼女はそう目の前に立っている将官服を着用した男性へと問いかける
「あぁ、私がこの演習の会長であり横須賀鎮守府司令の橘蒼海だ。」
その返答を聞くと彼女は一つの疑問を問いかける…
「……私がＩＦＦ上で捉えた艦娘には後輩が混ざっていましたが…
それはどういうことでしょうか？」
彼女のその質問に橘司令は、少し間を置きこう言った…
「…それは後から分かるよ…そろそろ皆が帰ってくるのでね。迎えに行くが君もついてくるだろ？」
橘司令の返答に疑問を持ちながらも彼女は「はい」と答えた。

彼女は橘司令が皆を迎えているのを呆然と見ていた…そしてその中に
見覚えのある後輩…そして親友の姿があった…この世界に来て姿こそ見たことはなかったが、
艦としての面影で彼女は親友の姿を直ぐに認識できた…いや出来てしまったのだ。
そして、その直後…後輩であり親友の「エンタープライズ」が飛びついてきた。
「久しぶりね。エンタープライズ。」
「ミシガン…ミシ…ガン……うわぁぁぁぁぁぁぁぁん！ミシガァァァァァン!!」
私は何とか姿勢を崩さないようにしながら彼女を慰めた…
「あらあら…仕方のない子ね。」
「うぅ…会いたかった…会いたかったよ…ミシガン…」
「はいはい。」

その後、彼女は5分間ぐらい泣き続け、私は彼女の頭を撫で続けていた。

「エンタープライズ。もう大丈夫？」
「ええ。もう大丈夫よ。ありがとう。」
エンタープライズが落ち着きを取り戻し、ミシガンから離れた
その時、一人の夏用軍服を着た男性がやってきた。
「貴様か。俺の艦娘を退けた例の艦娘とやらは。」
その男性はそうエンタープライズに対しごみを見るような目で吐き捨てた
「…なんですか。人にあったらふつう挨拶をするのが礼儀でしょう。」
私は何かを言い返そうとしたが彼女が先にそう言い返した。
「フン。誰が兵器ごときにあいさつしなければならないんだ。」
うわぁ…イラつく…とミシガンは思っていた。
「そこの艦娘。名前を教えろ。」
そして黒井と呼ばれる男性に名前を聞かれ私は渋々答えた…
「ミシガンといいます。」
「…エンタープライズにミシガンか。俺の艦娘を退けたんだ。さぞや戦力になることだろう。
橘。こいつらをもらっていくぞ。」
は？何であんたの戦力にならないといけないのよと思っていたとき…彼女から耳打ちされた。
……
私は彼女から聞いた伝言…ＭＰを呼びに行くためこっそり抜け出した…

そして私がＭＰを呼びに行き戻ってくると…黒井に技をかけているエンタープライズ。
どうやら黒井が殴りかかろうとしたらしい。

そして黒井は両脇を憲兵に抱えられて連行されていった。

そして無事？演習は幕を閉じることとなった…

第二章　日本国とミシガン
第九話　ミシガンとキスカ

「はい、ということで北方海域にただいま居る…ミシガンです。現在の水温は…って
ふざけてる場合じゃなかった…どうしてこうなったんだろう…」

それは突然のことだった。およそ1，５００機にもなる艦載機の襲撃を受けた
私たちはエンタープライズの核攻撃もあり何とか撃退した…
そして周辺のトラック泊地に立ち寄り私はキスカの様子を見にここまで来ているのだ・
「さてさて…補給も必要になってくるし…キスカは無事かな～」
そんな訳でキスカ泊地周辺まで来たわけで…
とりあえず浮上だね。浮上。
「副長。ソナー周辺どうなってる?」
「はい…えーと…特に機関音が聞こえてる風でも無いですね」
ソナーを確認したところ特に機関音はしないという報告を受け、私は浮上することに
した…潜望鏡深度だけどね…。
「潜望鏡深度１０ｍまで浮上!メインタンクブロー」
「了解!アイサーメインタンクブロー!」
私は潜望鏡深度までの浮上を命ずる…
そして航行状態から深度７０ｍ、５０、３０、２０…と徐々に浮き上がっていく。
潜望鏡が上がりキスカの様子が見えてくる…
見た感じ特に異常はない…とりあえず上陸することにした…。
上陸する前に手にある物を構える……
ある物…それは，ＳＩＧ　ＳＡＵＥＲ　Ｐ３２０，米軍で採用されている自動拳銃である…。

有事に備えて事前に準備しておいたのだ…。
「…上陸異常なし…艤装収納…」
上陸を無事に終え艤装を収納する…そしてＰ３２０を構え突き進んでいく…
まずは鎮守府の正面玄関である…
恐る恐る正面玄関を開ける…キィィという音を立て扉が開く…
「正面玄関クリア…次は司令の執務室だね…」
そして壁沿いに進みながら一階にある伊井波司令の執務室へと向かう…
「…おかしい…艦娘が少ないとはいえまったく居ないとはね…」
変な予感もしながら無事に執務室前まで辿り着く…
…ドアノブに手を掛ける…片手には安全装置を解除済みのＰ３２０…
そして…思い切りドアを開ける…。
「米海軍よ！武器を捨てて両手を頭の後ろに回しなさい！」
そう言い放ち執務室へと突入する…するとそこでは伊井波司令がぽかーんとした
顔でこちらを見ていた…
「えーと…ミシガン？どうしたんだ？」
ぽかーんとしながらも驚いたのかちゃっかり頭の後ろに両手を回している。
「伊井波司令ご無事でしたか…良かったです…あ…す、すいません」
そう言いながら先ほどから司令に向けていたｐ３２０を下す…
そして安全装置を掛けて腰のホルスター収納する。
「…えーとそれで…ミシガンどうしたんだ？何か色々警戒してるみたいだけど…」
そう聞かれ私は気づく。先ほどから無意識にキョロキョロしていたのだ。
とりあえず今までの経緯を話すことにした…。
そして今後新たな戦いが始まることとなるのだった…